

〔68〕 エドゥアール・ロック振付『アメリカ』

観客の〈見える能力〉を操作

2004年7月3日 東京新聞 夕刊

エドゥアール・ロック振付の最新作『アメリカ』は、感覚のふしぎな冒険に満ちている。

たとえば、強烈なスピードで動くダンサーの動きに眼が肉薄しきれず、その努力を放棄する。するとダンスは一種奇妙な非現実性をおびて、こんどは異なるレベルでの静けさと緩やかさを取り戻すのだ。ちょうど廻りはじめたプロペラが、高速に達したところで羽根が見えなくなり、擬似的に静止するのと、どこか似ている。

ロックは観客の〈見える能力〉を意識的に操作する。観客は、ある時は生身の肉体を感じ、またある時はイメージーションでバーチャルな感覚を想定して、さまざまに感覚のモードを切り替えて遊び始める。

〈見える／見えない〉の仕掛けは他にもある。スポットライトがダンサーの手だけ、顔だけを照射する。全体像を見せるわけではな

〔68〕 五ドゥアール・ロック振付『アメリカ』

観客の〈見える能力〉を操作

2004年7月3日 東京新聞 夕刊

い。舞台の大部分は深い闇に沈んだままだ。

かと思うと、映し出される映像に亀裂状の網をかける。そして舞台にも、まるで巨大なタタミイワシのような網状のスクリーン。イラム宮殿の壁を思わせるその透かし模様に向こうで、こんどは煌々たるライトに包まれたダンスが秘技の幻想性を身にまとう。

今回面白かったのは、ロックの振付が限りなくバレエに近づいたことだ。もともと彼が率いるダンスカンパニー「ラ・ラ・ラ・ヒューマン・ステップス」は、格闘技きながらの力業を發揮し、筋力と神経は抜群だったが、バレエとは無縁のダンスだった。しかし精密機械のように感覚を操作する動きは、バレエの動きの整合性と、はかrazも軌を一にしておしまつたらしい。

高速で右へ回り、即、左へ回る、という双方向のピルエットには、バレエの垂直原則は

〔68〕 エドゥアール・ロック振付『アメリカ』

観客の〈見える能力〉を操作

2004年7月3日 東京新聞 夕刊

不可欠だし、超高速の《跳んでーピルエツト
ー床に横倒し》の連続技は、まさにバレエ・
テクニックを超え、さらに発展させる結果に
なった。その最大の証左が、ポワント（トゥ
・シューズ）である。バレリーナの専売特許
のようなポワントを、ロックは男性にも使用
させる。性別が消えただけでない。ポワント
は抒情性のシンボルであることをやめ、精密
さと筋力の道具になったのだ。

内包するそのような遇激さと裏腹に『アメ
リア』の舞台はじつに物静かで繊細だった。
エドゥアール・ロックその人のように。

（6月17日、彩の国さいたま芸術劇場）